アメリカのオリエント学界における灌漑に関する最近の諸見解について

山　本　茂

近年，アメリカにおける古代メソポタミア研究が，先史および原史時代の研究に見るべき成果を挙げていることは注目に値する。しかしそれらの成果は個々の報告書や論文に発表されるのみで，それがシュメール社会形成の新しい歴史像といかに関聯するかは，未だ考察の時期ではないと一般に考えられていた[1]。しかし，アメリカにおいては，アダムズ Robert M. Adams，ブレイドウッド Robert J. Braidwood，ジェイコブセン Thorkild Jacobsen ら先史および原史時代メソポタミアの考古学的，人類学的，文献的（言語学的，神話学的方法を加味した広い意味での）新研究の開拓者たちみずからが，広い視野に立って，幾つかの機会に彼等の成果の意味や見通しについて語っていた[2]。これらの成果や発言を背景にして，1958年12月，上記3人もそのスタッフであるシカゴ大学の Oriental Institute において「古代近東における都市化と文化発展」Urbanization and Cultural Development in the Ancient Near East と題する大規模なシンポジウムが行われた。それは1960年，City Invincible と題してシカゴ大学出版部より公刊せられたが，50人に達するその Protagonists の中にはウイルソン John A. Wilson，エジャートン William Edgerton，カントー Helene Kantor，パーカー Richard Parker らのエジプト学者，ジェイコブセンら前記3人のほかオールブライト William F. Albright，デロウガズ Pinhas P. Delougaz，ゲルブ Ignace Gelb，ゲッツェ Albrecht Goetze，クレイマー Samuel N. Kramer，ランツバーガー Benno Landsberger，オッペンハイム A. Leo Oppenheim，スパイザー E. A. Speiser らのアッシリア学者ないし西アジア考古学者，種々の立場から比較史的研究を行っているマンフォード Lewis Mumford，ポラーニ Karl Polani，ジンガー Milton Singer，ラインシュタイン Max Rheinstein など，在米の著名な第一線関係学者が多数参加している[3]。個々の業績の中に埋もれていた彼等の歴史像や方法や，時には個人的な好悪までが大胆卒直に語られていて，古代東方における文明の形成発展について，まだ概説化せられていない洞察がみちている。もちろんそれらのなかには，見当はずれの議論や思い

つき程度のアイディアもないではないが，人類学・生態学 Ecology・社会学などへの積極的な関心の裏付けによって一本の筋を通した此のシンポジウムには，幾多の創意卓見があって，読者を inspire せずにはいない。しかしまた，こうした方法の重視に伴う欠点もないではない。そこで，450頁にわたる記録を万遍なく紹介することはやめて，(補註) シンポジウムの中心的課題の二，三について，報告や討議の主要な主張を整理し，あわせてその背景となった比較的最近の論考をも二，三紹介して問題点を明確にし，最近のアメリカのオリエント学界の一紹介としようとおもう。

I

このシンポジウムは，前後に Lewis Mumford による導入と結語をもち，その間に本論をなす三部7章の session がある。各 session には最初に30分くらいの presentation があり，そのあと司会者のもとに討論が行われる。各 session の主題，報告者は次のとおりである。

I．古代近東における社会の拡大の背景

(1) 沖積地における文明の勃興に影響した諸契機——メソポタミアを例として　R. M. Adams

(2) 高地における文明の勃興に影響を与えた諸契機——ネヂェヴ Neǧev を例として　Nelson Glueck

II．民族国家における文化の発展

アッシリア時代までのメソポタミア

(3) 政治制度，文学，宗教　Thorkild Jacobsen

(4) 書記の教育観　Benno Landsberger

新王国時代末期までのエジプト

(5) 都市なき文明　John A. Wilson

III．大帝国における文化の発展

(6) アッシリアとペルシア　Hans G. Gütterbock

(7) ヘレニズム時代およびローマ時代のオリエント　Karl H. Krealing

取扱われる時代が非常に長い時代にわたっていることは此のプログラムから一見して明らかであるが，Landsberger が取上げ，参会者に多大の感銘を与えた「書記の教育観」Scribal Concepts of Education を除けば，このシンポジウムの中心的問題はむし

ろ初期の時代にあり，この時代を取扱っている部分の方が内容も新鮮である。換言すれば「都市化と文化の発展」の問題は，都市形成期から民族国家形成期における，灌漑農業と，社会の拡大や階層化との関聯の問題に集約されてゆく。そこで本稿では，初期の時代のメソポタミアにおける灌漑と社会の発展の問題に焦点をおいて，諸所に散見する討論を集約して論じたい。なおまた，メソポタミアにおいて灌漑の占めた意義や，それに付随して派生する問題点については，「高地における文明」[4]や，メソポタミアにおける，その後の統一国家や帝国との対比よりも，エジプトの場合との対比の方が，少くとも此のシンポジウムの内容からすれば遙かに有効であるとおもわれるので，第5 session の内容の一部を紹介しておきたい。

オリエント世界における人工灌漑農業を，この地における「アジア的」専制国家形成の要因とみる見方は，方法論のちがいこそあれ，マルクス，ウェーバー，ウィットフォーゲルなど，この社会の特色づけをおこなった人々の誰もが執った見方であるのは言をまたない。しかし，マルクスはシュメール都市国家をほとんど知らなかったし，ウェーバーはシュメール都市が古い新石器村落からの連続的遺跡の頂点に位置することを知らなかった。1929年，指導的アッシリオロジストの一人シドニー・スミス Sidney Smith も，シュメール都市は古い村落の根がないと書いている。ウィットフォーゲルも戦前のアジア的生産様式についての諸著作では，中国に関するものを除いて，アジア的社会一般について人工灌漑の決定的役割を論じたに止まったが，戦後の「東洋的専制」Oriental Despotism, *A Comparative Study of Total Power*, Yale University Press, 1959 においては，中国ばかりでなくインド，中南米，とくに西アジアについての尨大なモノグラフをも考察の対象に入れて自説を強化した。シュメール社会についても，かつて二大論文とされた A. Deimel と Anna Schneider の労作[5]だけでなく，前者における綜合の基礎となった 'Orientalia' 誌上のダイメルの諸論文も引用されており，Jacobsen の原始民主政論などにも論及している。此の書物がオリエント社会を，水力社会 Hydraulic Society と定義づけているのは周知の通りであるが，この尨大な書物の基本的立場は戦前と大差なく，より積極的に東洋的社会を専制的社会として確立するにある。彼は都市の勃興の革命的性格を強調するチャイルド流の Urban Revolution の考え方[7]には批判的であり，「一つの発展形態としての都市形成の不適当な強調は，農業文明の一般的進化について，明らかに間違った命題を擁護することとなる」という。この間違った命題は「社会の進歩・発展を一つの直線的で必然的なものと考えて」おり，それは歴史の事実に矛盾する。従って彼は，「オリエントの高度の農業文明とそ

の都市や農村の諸条件は，西ヨーロッパのものとは決定的に異なる発展形態を進んできたものとして，終始一貫，理解してきた古典派経済学者たち」の方に味方する。そして農業史の分析は，「農村・都市の農業文明には，水力的文明 Hydraulic Civilization と非水力的文明の，すくなくとも二つの，主要なタイプが存在し，高度の文明を二つの異なった部分に分化させたこと，また原始的な農民たちが水利農業 hydroagriculture の方向に進むことによって，全時代にわたって社会構造に一つの革命的変化がおこったことなどを確めることができる」。そして「二つの異なる部分への農業文明の分化は，都市革命に先行しておこった」のであり，それは水力革命 hydraulic revolution と呼ぶにふさわしい深刻な影響を農民の運命に及ぼしたというのである[8]。

この基本的な考え方は 'Oriental Despotism' の諸所にあらわれている。例えば，「あらゆる定着民のうちで，水力農業のパイオニアたちが最初に合理的な計算と記載のシステムを発展させたのは，けっして偶然ではない。また，水力社会の記録が単一の都市ないし都市国家，王室領土ないし封建的領地ばかりでなく，諸国ないし帝国全体の町や村を包含していたのも偶然ではない[9]」と云っていることから，シュメール都市をも hydraulic society と見ていることは確実である。前述の一般的言明に述べられた hydraulic revolution を，ウィットフォーゲルはシュメール都市国家形成以前のものとしていることは疑いを容れない。

もちろんウィットフォーゲルも，水力社会に発展段階のあることを認めており[10]，'Oriental Despotism' の中でも，歴史時代のシュメールを「単純な水力社会」と呼んでいる。しかし，それがいかに'単純な'社会であろうとも，彼の理論に依れば，この水力社会の形成以前に，彼のいう水力革命が存在していなければならぬ。その結果形成された水力農業 hydraulic agriculture のもっとも重要な特徴として，Wittfogel は，特定の型の分業を含むこと，耕作の集約化，大規模な協力を必要とすること，の三点をあげている。そこで，もしウィットフォーゲルのいうように，シュメール都市が本質的にヨーロッパの古代都市，すなわちギリシア・ローマ都市と異なるのであれば，その形成以前に，水力経済が存在しなくてはならない。換言すれば，乾燥ないし亜乾燥地域の大河流域灌漑農耕社会は，特別な阻害条件がない限り，常に水力経済と専制社会への発展が約束されている筈である。事実，ウィットフォーゲルは，チグリス，ユーフラテス河のような大河川の水は，小規模な作業を許さないと思い込んでいる[11]。

こうした伝統的なヨーロッパ的灌漑経済論に対して，第1の session の報告者 R. M. Adams を始めとして，このシンポジウムの準備者たちは，彼等自身の調査の結果[12]

——それは provisional なものであることは調査者自身が認めている[13] が——に基づいて，メソポタミアの初期の国家の形成において大規模灌漑の演じた役割を，むしろ否定しているように思われる。

沖積平地における農耕民が，この地に適合した灌漑技術を発展させた準備段階については，大部分推測の域をでない。確実に云えるのは，前5千年紀の終りまでに，多数のウバイド Ubaid 期村落ないし町が，両大河の水路に沿って散在していたことだけである。此の点については，Oriental Institute と American Schools of Oriental Research によって，アダムズの指導のもとに1956～57年に行われた，アッカード地方の地表調査 Surface Survey が重要な材料を提供する[14]。この調査の方法は，最近の考古学で主として行なわれる，一遺跡を層位的に徹底的に調査する方法ではなく，全く該地方の組織的な表面踏査のみをとる。その結果，いくつかの時期にまたがる複雑な遺跡の場合でも，その大きさと居住の時期とをほぼ明らかにしうるという。それは，煉瓦製造，井戸堀り，墓地の造営，家屋の基礎工事などによって，下に横たわる地層から土器や煉瓦や各種の石製品が攪拌され，最下層に属すべき最初期のタイプのものが，遺跡の mound の表面に見出されるからである。5千年以上の居住の歴史を有するクタ Kutha の場合でもそうであった。こうした調査を行う基礎として，Adams は Ubaid, Protoliterate, Early Dynastic, Akkad, Ur III および Isin-Larsa, 古バビロニアおよびカッシートの7つの時代の陶器の主要なタイプを示している[15]。こうして前4千年紀の始めから前2千年紀の終りに至る居住地遺跡を96箇所見出し，それぞれの遺跡の居住年代を推定して，1) ウバイド～原文字 Ubaid～Protoliterate 時代，2) 初期王朝 Early Dynastic 期，3) アッカード Akkad 時代，4) ウル第3王朝 Ur III およびイシン—ラルサ Isin-Larsa 時代，5) 古バビロニア Old Babylonia 及びカッシート Cassite の5時期について，別々の略地図を作成した[16]。そのうちには，Kish, Jemdet Naṣr, Kutha, Sippar, Uqair などのかなり大きな遺跡を含めて12の既知の遺跡があるが，大部分はほとんど印象を与えない小さな mound ばかりである。このことは，アッカード地方においては，最も普通の居住形態が，村落ないし小さな町 small-town であったことを示しており，南方のシュメールの大規模かつ多数の都市国家の存在と著るしい対照を示している。しかもアッカード地方だけをとってみても，調査の結果では南部に行くに従って遺跡が大きくなっていくという[17]。

今日のイラクの沖積平野の年間降雨量は極めて少なく，農業は一義的に灌漑に依存しているが，この状態は，オリエントにおける農耕開始以来の8千年間にほとんど変らな

かったと考えられる。従って先史・原史農民もまた，河流に灌漑用水を求めたことは疑いない。事実 Akkad 地方の初期の居住地は，古代の幾つかの水路に沿って，北々西から南々東へ数本の線をなして連なっている。これらはいずれも，Nippur や Kish や Sippar がユーフラテス河の岸辺にあったといわれた頃の，ユーフラテス河の主要水路であったにちがいない。

3千年にわたる5時期の地図を一見すると，居住地跡のつくる軸線がほとんど変化しないという印象を先ず受けるが，しかしよく注意してみると，時期によって放棄される水路もある。例えば，初期王朝期の最大幹線水路は，その直後の Akkad 時代にはほとんど放棄され，その再開はバビロン第一王朝時代を俟たねばならぬ有様である[18]。

ここで Adams は灌漑と国家の関聯の問題に触れる。「初期のメソポタミアの国家形成に関して，時に大規模灌漑に帰せられる役割を考慮に入れると，大人工運河 large artificial canals の出現が明らかにおそかったのは，興味ある事実である。その代り，居住地は，この地域の最初の農耕民の時代に既に存在していた自然水路にそって並ぶ。従って，必要な灌漑は恐らく，比較的小規模な，簡単な運河網をもって遂行されたのであろう。古バビロニアおよびカッシート時代になってはじめて，それ以前には用いられなかった線に沿って居住地が起ってくるが，それは運河をあらわすのかもしれない。もっとも，アッカード時代において，暫く用いられなかった水路が一部再開されたのは，ある程度，人力に依ったものかもしれない。古バビロニアおよびカッシートの運河は，この時代における人口増加と関連して起ったように思われる。いずれにせよ，この地域（即ちアッカード）においては調査した限り，大規模灌漑が，初期王朝期の城壁を有する都市国家の形成の契機であったほど早く行われたことを示唆するような証拠は全くない[19]」。

この調査報告で強調された小規模灌漑 Small-Scale Irrigation の概念が，本シンポジウムの基本的命題の一つである。実際に行われた考古学調査はアッカード地方およびディヤーラー河地方だけである[20]が，Adams はこれらの調査結果を敷衍して，シンポジウムでの冒頭報告において次のように云う。「ウバイド期居住地の規模と分布状態は，これらの初期の共同体 communities が，そのすぐ近くにある河流から引いた短い運河に依存していたことを暗示する。また恐らく，全く人工的手段による制約を加えない自然の洪水をふくむ，一層簡単な灌漑技術に頼っていたであろうことを示唆している[21]。換言すれば，居住も耕作も自然の水路に沿った線状の飛び地 enclaves に限られていた。……先史末期および原史時代を通じて共同体の規模は著るしく拡大したとはいえ，

このような居住・農耕形態は本質的には非常に長い期間にわたって不変であった。大規模な，統合的な灌漑組織は，メソポタミア沖積平野のなかで最も都市化された地域（即ちシュメール地方）でさえも，領土国家への政治的統合過程が十分進行したあとまで始められなかった。アッカードおよびそれに接続するディヤーラー河下流地方では，大規模灌漑の開始はさらにおくれる[22]」。

シンポジウムでは，こうした先史・原史考古学の専門家の発言と相呼応して，一人の若い人類学者の発言が注目された。それは Adams を Director とする上述のアッカード地方の考古学調査を短期間手伝った後，ユーフラテス河下流域の Daghghārah の町の近くで，現代イラクの灌漑村落を独自に調査してシンポジウムの直前に帰って来たシカゴ大学の人類学の fellow，フェルネア Robert Fernea の発言である[23]。

彼が調査したのは単なる村落社会ではなく，その中心に村落をもつ部族社会であった。従ってそこでは，灌漑の問題が，部族社会という，より大きい関連において答えらるべきであろう。この社会の政治組織は典型的に分節的 segmentary であり，中央統制 central control を必要とするかにみえる灌漑問題を，この社会がいかに処理したかは興味ある問題である。この Fernea の調査した社会は同族結婚家系の勢力が強く，それが独自の社会集団をなしており，特別な目的のためにのみ他の家系と関連をもつ。そのような目的のなかにはもちろん，取口水路 access の維持に必要な作業の配分とか，部族長の土地や部族の guesthouse を維持するための土地を灌漑する運河の cleaning などの，灌漑問題があった。ほかの場合には対抗しあいながら，特別な場合には族長のもとに協同するという慣行は，ベドウィン人 Bedouins の研究者にはよく知られているという。そしてこの社会の農民の多くは，この遊牧アラブの最近の子孫である。ベドウィン人は，侵略や戦争のためには結集してその族長の指揮に従うが，平常はほとんど各家系が独立して行動する。事実，運河の建設や cleaning などの協同作業を指すために今日使われている sa'ada や 'una'a という言葉は，かつて戦争のための相互援助を意味したのと同じ言葉なのである。この社会は，ダムや水門などの大規模な施設の運営には直接あたっていない。このことは別種の問題を提起する。いずれにせよ，南部ユーフラテス河のこの部族は，中央集権的なヒエラルキー組織なくして，相当な範囲の灌漑問題を処理していたのである。

この現代イラクの灌漑小集団には，もう一つ注目すべき事実がある。それはバグダードの中央政府によって任命され，これに対して責任を負うが，地方村落に常駐して働く灌漑専門技師の演ずる役割である。政府の統制下の灌漑組織とは関係のない問題を，地

方的灌漑組織を分ちあう諸家系集団が，此の技師のところへ持ちこむのである。以前には，一般の世論や第三者の介入によって解決された，古くからある問題の解決が，灌漑専門家に委ねられる場合が段々増していく。イギリスおよびイラクの役人の証言も，この彼の印象を確証したという。そしてこのことは彼によれば，なにかの手段で興ったか或いは現に形成過程にある都市中心が，その支配を周辺の農民の上に及ぼしてゆく道程を示すように思われる。従って此の支配 control は，単に軍事的・強制的なばかりでなく，むしろその社会に自発的に受けいれられてゆく。都市中心が，強制労働によって造ったごときモニュメンタルな施設を通じて，一水系 a water system 全体に対して支配を拡大しつつある場合を想像してみよう。おそらく，国家的利益をまもるために任命された役人が，土着の共同体によって，嘗ては彼等自身が処理していた問題を解決するよう要請される場面が生ずるにちがいない。これこそ農村地域 rural areas の都市中心への統合過程の一部，すなわち都市支配者の権力がこれに従属する村落社会の人々の目からみて正当なものとなってゆく道の一つであったかもしれない。

このような Fernea の考察の最後の部分は，最早たんなる観察ではなく，その歴史への適用の一例を自ら示したものである。interdisciplinary な討議に際して，一つの学問的方法に基づく結果を他の分野に適用するには幾つもの考え方が可能であり，ときには誤った結果に導くこともあるのはいうまでもない。Fernea の人類学的，民族学的調査を歴史の暗期に適用するに当って，このシンポジウムにおいても二，三の相異なる考察が表明された。しかし，この session の主役を演じた Oriental Institute のスタッフたち (Adams, Jacobsen, Braidwood, Tax ら) は，この調査が，まさしく古代文明が発生したのと同じ地帯で，しかもほぼ相似た自然環境のもとで行われたこと，また社会的環境についても，Fernea の観察した部族的灌漑社会は 70～80 年前の，相争う部族集団よりも大きい社会による介入がほとんどなかった時代にも，同じ類型がゆきわたっていたことが示されること，などの理由で，分節的な (segmentary) 非重層化社会においても灌漑組織の維持は可能である，という彼の観察の論点を歴史的に適用することは正しいとしている。もちろん此の観察を歴史像の再構成に用いうるのは，Jacobsen のいうように先史段階に対してであろう。

しかし同時にそこからは，前述の，先史・原史・歴史遺跡の準備的調査の結果と結びつけて，小規模ないし中規模 moderate size の灌漑組織のための最初の管理上の必要は，初期の都市国家の形成，ないし一般的にいって政治的統合への歩みを促進しはしなかったという Adams の推論，換言すれば，十分に発達した大灌漑組織が歴史の起動

力であるという仮説は正しくないという Jacobsen の結論[24] を引き出すこともできるのである。

観察，調査された事実と此の推論とのあいだに飛躍がないかという重要な問題は最後に論ずるとして，これらの議論に屢々使われる小規模灌漑，大規模灌漑という概念は，果たして全く場所と学的伝統を異にする複数の文明中心の比較史的検討に耐えうるかどうかという疑問をおこす。これについては，このシンポジウムである程度肯定的な結論が出たように思われる。アメリカの古代文明に関する考古学専門家であるハーバード大学のウィリー G. R. Willey 教授は，ペルーでも灌漑網の発達する500年から1000年まえに，中心神殿をふくむ複合社会が出現したことを認めたのち，神殿の周囲に密集した3万の部屋をもつ都市の発達は，全河谷的灌漑組織 overall valley irrigation systems の勃興と時を同じくするという。そしてこの灌漑組織は全河谷をおおう，十分に発達した複雑な運河網 full, complicated canal networks をもっていたという[25]。教授は用心深く大規模灌漑という語をさけているが，この指摘は一見，都市中心の形成と大規模灌漑の出現の時期が一致する例のようにおもわれる。

しかし，古代メソポタミアの場合とペルーの場合とでは，自然的・歴史的背景の規模が異なる。古代東方の専門家のいう大規模灌漑とは，その距離200マイル，その灌漑面積はおそらく2000平方マイルにおよぶナフルワーン運河 Nahrwān Canal のごとき真に大規模な組織である[26]。これに対して Willey 教授が取上げたペルーのヴィル河谷 Virú Valley の例は，その長さが5マイルから10マイルに過ぎず，Nahrwān 運河に比較すれば全く小さいというほかない。ペルーでも更に後になると北海岸において，Virú Valley のような河谷を，二つ以上統合した灌漑組織が建設されるが，そのようなものが漸くかすかに，大きさにおいても目的においても，オリエント学者のいう大運河組織に似たものを示しはじめるに過ぎないのである。

いずれにせよ，Virú Valley の灌漑網を Nahrwān 運河と同列に論ずることが正しくないことは明白である。しかしながら，Virú Valley をおおう灌漑網は，近東とペルーを問わず，更に小規模であった最初の灌漑に対比すれば，その規模においても複雑さにおいても，重要な新段階を示すものかもしれないと Adams もいう[27]。筆者はこれとシュメール都市国家段階の灌漑組織とを対比せずにおられない。実際，Nahrwān 運河のごときものを大規模灌漑というならば，シュメール都市の灌漑組織を大規模というのが不可能であることはVirú Valley の場合と全く同断であろう。しかし同時に，これを Ubaid 村落と区別せず，同じく小規模灌漑と見ることもまた，事実に適合しないよ

うに筆者には思われる。これもまた，Virú Valley と同じように重要な新段階を示しているのではなかろうか。都市化を全体の主題として取りあげていながら，都市の概念すら明確に規定しえなかった[28]このシンポジウムの弱点が，ここに露出したといわざるを得ない。それは結局，都市，端的に云ってシュメール都市の社会，経済的構造や規模が明確になっていないことに基づくのではないか[29]。筆者はここであらためて先史，原史考古学と広義のアッシリオロジーとの接点としてのシュメール都市国家研究の意義を感ずる。

II

チャイルドが嘗ていったように[30]，フランクフォート Henri Frankfort がメソポタミアとエジプトの文明形成を余りに截然と別個のものとして描いて以来，エジプトとメソポタミアの王権観や宇宙観や自然観の差異は，すっかりポピュラーになってしまった。しかし，政治的発展過程やエコロジカルな背景における差異を，両文明中心の夫々の研究者に鋭く意識させた点で，このシンポジウムは一つの大きな成果を収めたのではなかろうか。エジプトを取扱った第5 session における Wilson の冒頭発表も，Adams によって導入された先史，原史段階，Jacobsen によって始められた民族国家への発展，の二つの session のあとを受けて，メソポタミアの場合を意識して行われた。討議においてもまた，エジプト学者，アッシリア学者入りまじって発言している。

エジプトとメソポタミアの灌漑条件にはどのようなちがいがあったか。両地方における統一国家形成過程が，‘文明の誕生’の時期がほぼ同時であるか或いはメソポタミアの方が少し早いとされているのに，エジプトではほとんどそれと時を同じくして統一王国が形成され，メソポタミアの統一国家が数百年以上おくれたのは何故か。また，エジプトには都市国家段階がなかったのか。そもそもエジプトには都市がなかったのか[31]。これらの問題は，アッシリオロジストの基本的な問題であると同時に，また，エジプトロジストにとっても基本的な問題であるが，両文明の比較によって始めて鋭く解明さるべき問題であろう。Wilson はこうしたことを十分計算にいれたうえで‘都市なき文明’という題を掲げたにちがいない。というのは，シンポジウム全体が，社会の発展・拡大と文化発展の最初の決定的な段階を，Urbanization に求めている以上，この主題は，参会者全体，とくに，アッシリオロジストの注目をひかずにはいないからである。しかも，エジプト文明の形成期の都市遺跡が発見されていないことは事実であるが，そのこ

とが，この時期に実際に都市中心が存在しなかった事実を示すのか，或いはエジプトの特殊事情に基づく，発見・発掘の困難によるものか，第一線のエジプト学者の間にも見解が一致していない現状である[32]。したがってこの主題で一貫される報告はエジプト学者にも激しい批判を惹起した。

エジプトは，その歴史の最初に，都市国家という目に見える予備段階をもたずに，民族国家を発達させた。この歴史時代への飛躍のとき，全エジプトの可耕地が，単一支配のもとに単一組織有機体となった。500～600マイルの距離をもった国家は，単一都市に焦点をもつ国家とは機能的に別物である。エジプトには，初期の主要都市が長い政治的変化に耐えて後世まで大都市として存続するようなことはなかった。王朝期のエジプトには，アレクサンドリアやアテネやローマの如き永続的文化中心はなかったし，Nippur や Babylon に対比さるべき場所も全くなかった。

エジプトとメソポタミアの歴史の地理的側面には，もう一つ重要な差異がある。Jacobsen や Adams がそれぞれの session の冒頭報告で強調したように，メソポタミアの文明の重心は，ウルやエリドゥやウルクのごとく，初めは最南部の湿潤地帯にあったが，徐々に北方へ移って行った。そしてその理由の一半が，南部が徐々に塩化したことに帰せられた。旧中心の塩化による生産力の低下ないし荒廃のために，国の重心が北部の新しい生産力の豊かな土地に移行したというのである[33]。そこには一種の置換過程が作用している。これに対してエジプトの発展は付加的である。上エジプトの大部分は最初から viable で，おそくとも第3王朝までにはノモスに区分せられたが，下エジプトのデルタ地帯が沼地や塩分を含んだ沼沢から解放されたのは，もっとおそかった。都市の場合とは逆に，国土の生産性はエジプトの方が持続的であった[34]。

この国土の付加的発展も，都市国家段階の欠除も，ウィルソンによれば，エジプトおよびナイル河の地理的特徴と関連がある。ほとんど雨のないエジプトでは，水は専らナイル河の溢水に依存する。そしてナイル河の堆積泥土は，底の深い自然の煉瓦のなかで乾燥する。この過程で塩分の大部分は煉瓦の間の裂けめの底深くのこり，地表近くまで上って来ない。またナイル河の水は耕地に溢れたのち，洪水が止むと再びナイル河に自然に排水される。メソポタミアでは運河やその堤防の水が徐々に高さを増し[35]，水の供給源の方が耕地よりも高いことが屢々あった。そのため溢水は耕地面にながく残り，土壌の中へ滲透する。このような，塩化による土地の放棄という問題は，エジプトには起らなかった。このためにエジプトでは，強力政府が努力しさえすれば，いつでも耕地を付加することができた。古王国時代のデルタや最南端部，第12王朝やプトレマイオス王

朝下のファイユム Fayyum 地方などがそうであった。

ナイル河のこのような特徴は，当然，メソポタミアとはちがった灌漑制度を発達させる。それが溜池法 (catch)basin system である[36]。上エジプトの細長い地溝では，洪水の水は運河組織よりもむしろ個々の溜池によって利用せられた。洪水時には水は長方形の窪地に導かれ，そこで土壌に滲透し，新しい沈泥をのこす。メソポタミアの運河組織は，幹である大河と強い枝である運河をもった木のごときものであって，その果実である都市が水路にそって発達した。そしてこれらの都市居住地は，運河の一つが強力かつ有用なときには，互いに有機的な関連をもった。そのために都市国家は，水路に沿った軸の方向へ発展したかもしれない。これにたいしてナイル河は草や竹の茎のようなもので，basin はそこから生える葉のようなものである。そしてこのベイスン・システムは，明らかに地方分権的であった。地方のベイスンの維持には大規模な社会的努力を必要とせず，地方の小集団が恐らく自らのベイスンを持っていたであろう。上エジプト固有のこの灌漑法の地方分権性が，都市国家のごとき大組織の未発達に何らかの関係があるかもしれない。

他方また，主要水路がナイル河一本であり，万事がナイル河に結びついていた故に，その意義は遙かに重要であった。この水路は交通手段であり，また生命の水の源であった。このことがエジプトにおいて，都市国家の前段階を伴わないで一挙に統一国家が形成されたことに関係があるかもしれない[37]。

III

最後にもう一度人工灌漑組織と社会発展との関聯の問題に帰って本稿を結びたい。

このシンポジウムが全体として，都市国家形成の動機ないし原因としての大規模灌漑という観念を，最近の考古学的，人類学的知見にもとづいて否定しようとしていることは前述のとおりである。しかし，この否定のしかたに問題がある。このことはシンポジウムのなかでも，まったく閑却されていたわけではない。Adams は，大規模灌漑が，領土国家への統合過程が十分すすんだあとではじまったことを論じたあとで，次のように述べている。「しかし，このような再構成にもとづいて，初期の都市国家の政治組織を促進し，その大部分を形成した強力な中央集権的官僚制度を，灌漑が必要としたことをもし無視するならば，それは，ますます複雑になり且つ階層化してゆく社会秩序にたいして，灌漑が実質的に影響をおよぼしたことについて，いかに我々が無知であるかを

暴露するだけである」。

換言すれば，灌漑は社会の拡大，強力な集権的政府の原因とはいえないけれども，いったん社会が拡大と分化をはじめると，その発展の速度や方向に重大な影響をあたえるというのである。従って，社会拡大の原因としての灌漑組織の意義を否定したようにみえる Adams や Jacobsen の上述の発言（42～43，44～45 ページ前出）も，その意義の全面的否定ではなかったことになる。Adams の言葉のなかでは，「灌漑組織のための最初の管理上の必要」のなかの「最初の」という語に否定の力点があり，Jacobsen の言葉では「十分に発達した大灌漑組織」という表現における large and fully developed の語に否定の力点がかかっていたのである。言いかえれば，灌漑が社会組織に重大な影響をあたえるのは，灌漑以外の契機にもとづいて社会が一定の段階に発展した後であるということであろう。

一方，Jacobsen も指摘しているが，王 lugal という文字が最初にあらわれる Ur の古拙文書には，はやくも gugal と呼ばれる灌漑専門の役人が現われる[39]。この職名は Ur の Archaic Texts には一度しか出てこないが，字義からみても，後代と同じく運河の維持と水の配分に特に責任のある役職であったにちがいない。したがって Jacobsen のいうように，「都市社会の発展とともに，国家のために灌漑を統制する，権威ある役人が出現した証拠もあらわれる」わけである。しかし，Jacobsen をもってしても，「一般に慣習にもとづいて機能する社会から，官僚や政府権力の組織的使用によって秩序を維持する社会への移行は，灌漑，とくに大規模灌漑によって始動したといわれるが，灌漑に関聯して起こる仕事にたいして，どのような役人がおかれていたか」という質問にたいする，史料にもとづいた解答は，わずかにこれだけであった。

Jacobsen とならんで社会経済史料に造詣が深いといわれる Gelb も，民族に関してその蘊蓄の一端をもらしたにとどまる[40]。結局，アメリカのオリエンタリストは，Jacobsen が第3 session の結語的コメントでいうように，「シュメール経済は，現在のハンドブックが述べているよりもはるかに複雑であり……我々はたしかに，神殿ばかりでなく大宮廷経済をもふくむ種々の大分配機関や，いなかの私領や，さらにまだ我々の知らない他の型をも認めねばならないであろう[41]」という状態にある。先史・原史・歴史考古学や，政治史的見通しや，神話・文学の研究において此の20年間，世界の学界をリードしてきた人々も，此のシンポジウムの最大の焦点の一つとなるべきシュメール都市国家の構造や規模については，まだほとんど，適確な見通しさえ持っていないわけである。そのためウィットフォーゲルのやや固定したテーゼに対して，先史，原史段階

からの重要な批判を出すこともできたし，またメソポタミア史の展開に伴うエコロジカルな変容の具体的な姿を一部明らかにすることもできた人々が，肝心の時期からのウィットフォーゲルに対する決定的な批判を行いえなかったのである。

（筆者は京都府立大学文家政学部講師）

註

1) Cambridge Ancient History, vols. I, II の改訂版が，全体として未完成であることも，こうした状勢を示すものと考えられていた。しかし極く最近，その第1巻第13章をなすべき C. J. Gadd, The cities of Babylonia, Cambridge, 1962 が出版された。その取扱う範囲は Early Dynastic Period II および III で，経済的な目的のために発達した文字がはじめて支配者の政治的・宗教的目的に使用され，歴史的支配者がおぼろげながら現われる時期から，Urukagina の改革，帝国への移行におよぶ。従って Uruk, Jemdet Naṣr, Ur の古拙文書の属する Protoliterate および Early Dynastic Period I の時代については未だ改訂版が出ていない。

2) Robert M. Adams, Developmental Stages in Ancient Mesopotamia (Irrigation Civilizations : A comparative study. A Symposium on Method and Result in Cross-Cultural Regularities, Social Science Monographs I, Pan American Union, 1955, pp. 6～18) ; Some hypotheses on the development of Early civilizations (American Antiquity XXI, 1956, pp. 227～32). Rebert J. Braidwood and Charles A. Reed, The Achievement and early consequences of food-production : A consideration of the archeological and natural-historical evidence (Cold Spring Harbor symposia on quantitative biology XXII, pp. 19～31). Th. Jacobsen, Early Political Development in Mesopotamia (Zeitschrift für Assyriologie, N. F. XVIII, 1957) など。

3) そのほかヘレニズム時代のオリエント考古学，ヒッタイト学，古典考古学，アラビア史，古代中国史，地理学などの専門家も加わっている。ヘレニスティック・オリエント考古学の Carl H. Krealing は，オリエンタル・インスティチュート所長として，この事業の企画にあたった。

4) 「高地における文明の勃興に影響した諸契機」と題する第2 session では，Neǧev 高地を例としながら，大文化圏の影響や商業の意義が重視された。パルティアとローマの対立時代に重要な役割を演じた大都市国家 Ḥaṭra（北イラクの高地にある）も，近くには極く小さい川しかなく，その繁栄はすべて商業の支配に基づくという（City Invincible〔以下 C. I. と略す〕p. 56, Al-Asil の発言）。第1 session においても Albright が，Qatabān 王国が大キャラバン貿易で富んだ時期にはじめて，念入りな灌漑組織と大都市が出現した例をあげている（C. I., p. 41）。シュメールの地が早くから西アジア交易圏にふくまれていたことはよく指摘

されるが，シュメール都市国家の形成・発展と商業の具体的な関聯については本シンポジウムではほとんど触れられなかった。

5) A. Deimel, Die sumerische Tempelwirtschaft zur Zeit Urukaginas und seiner Vorgänger, Rome, 1931 と Anna Schneider, Die sumerische Tempelstadt, Essen, 1920. ただし Schneider の論文は，前掲 Gadd の論文や Adams, 'Developmental Stages ……' の Bibliography からは脱落している。C. I. でも Gelb 教授が「ある遺跡で発見されたテキストに基づく唯一の再構成」として Deimel の上記論文だけ挙げている。A. Falkenstein, La cité-temple sumérienne (Cahiers d'Histoire mondiale, vol. I, 1954, pp. 784～814) では，まだダイメル論文とならんで「基本的な」文献とされている (p. 790, n. 12)。

6) Oriental Despotism, Bibliography 参照。

7) たとえば V. G. Childe, Man makes himself, New York, Mentor Books, 1952, p. 19.

8) これら Wittfogel の基本的な考え方の要約は，William L. Thomas (ed.), Man's Role in Changing the Face of the Earth : An International Symposium under the Co-chairmanship of Carl O. Sauer, Marston Bates, Lewis Mumford. Chicago, 1956. 所収の彼の報告からとった（中島健一訳『カール・A・ウィットフォーゲル「治水文明」』（『歴史地理学紀要』第4集，1962, pp. 167～193)。

9) Oriental Despotism, chap. 3, § 2, II.

10) 例えば Developmental Aspects of hydraulic Society (Irrigation Civilizations〔前掲註 1) 参照〕, pp. 43～52) 参照。

11) 『ウィットフォーゲル「治水文明」』参照。この点については，本文で後にふれる R. Fernea の観察が有力な批判を提供する。

12) R. M. Adams, Survey of ancient watercourses and settlements in central Iraq (Sumer XIV〔1958〕, pp. 101～4, with 6 figures) および Th. Jacobsen and R. M. Adams, Salt and silt in ancient Mesopotamian agriculture (Science CXXVIII〔1958〕pp. 1251～58). 以下前者を Adams, Survey, 後者を Jacobsen and Adams, Salt and silt と略す。

13) たとえば Adams, Survey, p. 102 左段。

14) 上掲 Adams, Survey がその報告である。

15) ibid., p. 101 および Fig. I.

16) ibid., Figures 2～6.

17) ただし，それらの遺跡間の距離も南に行くに従って大きくなるので，人口密度には，地方間に大差なかったかも知れないという。ibid., p. 102 左段。

18) ibid., Figures, III, IV, VI. をみよ。

19) ibid., p. 101 f.

20) アッカード地方については Adams, Survey, ディヤーラー河地方については Jacobsen, and Adams, Salt and silt に報告されている。

21) このシンポジウムは「確立された農耕村落社会」をその出発点としている。しかしこれについては，バビロニア時代の発展を取扱った第3 session のなかで Albright が疑問を提出している。前1万年ごろ，西アジアにおける中石器の開始期における発端的農耕 incipient agriculture の開始から，文字が使用されるまでには，7千年の間がある。前7千年ごろから約2千年間の前土器新石器時代には Jarmo, Jericho, Shimsharah, Khirokitia に例示される定着村落や町が，数百以上も，パキスタンからテッサリアにいたる地域につくられていた。メソポタミア文明のこの長い先史のあいだ，メソポタミアはこの広い舞台の中心にあり，あらゆる方向から来る外敵を撃退する力を増すために，農業と商業の発展がはかられた。この時代にメソポタミア人の mentality が形成されたのではないかと彼は考えている (C. I., p. 71 f.)。この指摘は，先史時代の未開社会 barbarian societies にあってもヨーロッパは決定的にヨーロッパ的に行動していたという V. G. Childe の考え方 (The Prehistory of European Society, Pelican Book, 1958) に相呼応するものとして興味深い。

22) C. I., p. 26 f.

23) ibid., p. 35 f., p. 38.

24) ibid., p. 36, p. 37.

25) ibid., p. 40. なお G. R. Willey, Prehistoric settlement patterns in the Virú Valley, Perú. Bureau of American Ethnology, Bulletin No. 155 (1953) 参照。Willey の諸論著については，C. I., p. 294 に4篇挙げられている。

26) C.I., p. 40. Nahrwān Canal については，Jacobsen and Adams, Salt and silt, p. 1256 f. にやや詳しく述べられている。

27) C. I., p. 40

28) アッシリア，ペルシアを取扱う第6 session において，シカゴ大学の社会科学教授 B. F. Hoselitz が，討議のなかに使用された都市の指標を幾つか列挙しているが，それら相互の関連についてはほとんど論ぜられていない (p. 183 f.)。また Jericho の初期の遺跡を都市と呼ぶべきかどうかについても，或る程度問題にはなった (p. 58 ff.) が，明快な議論は出ていない。たゞ，Braidwood (p.59 f.) および Albright (p. 72) はこれに否定的である。なお，この問題については R. J. Braidwood, Jericho and its setting in Near Eastern history (Antiquity XXXII 〔957〕,pp. 73～81) ; K. M. Kenyon, Reply to Professor Braidwood (Antiquity XXXI, 82～84) がある。

29) この点で，И. М. Дьяконов, Общественный и Государственный строй Древного Двуречья—Шумер, Москва, 1959 および中原与茂九郎教授「シュメール土地制度について——初期王朝時代まで——（京都大学教養部「人文」第9集〔1963〕所収）が，シュメール都市の面積や人口に分析を加えているのが注目される。

30) V. G. Childe, The Birth of Civilization (Past and Present, 1952, No. 2, pp. 1～10).

31) このほか，エジプト語には家族関係を指す言葉が少なく印欧語と著しい対照をなすこと（p. 139），エジプトでは農業上の周期とナイル河の水量の増減との間に理想的な関係のあること（p. 140），古王国は果たして一般に考えられているほど強力な王権を持っていたかという疑問，エジプトの史料の少ないことに対する考え方の相違（特に Edgerton, p. 143 ff.，および Kantor, p. 155 ff.），エジプトには法典がないといわれるが王を拘束する規則はあったのではないかという疑問（p. 153）などが問題とされた。

32) Wilson は，首都テーベの遺構はこれまで，発掘によっては明らかにされなかったが，将来とも発掘によっては検証されないであろうと言う（p. 164）。我が国の数少ないエジプトロジストの一人加藤一朗氏も「エジプトでは層位学の適用はほとんど不可能である」という暫定的な結論を下している。加藤一朗，山本茂「オリエントの灌漑文明」（註）16，17（学生社版『古代史講座』第2巻〔1962〕，所収）参照。

33) C. I., p. 28 および Jacobsen and Adams, Salt and silt のなかの Historical Role of Soil Salinization 参照。なおメソポタミアの歴史地理に関しては，諸所に Lees, G. M. and Falcon, N. L., The geographical history of the Mesopotamian plains (Geographical Journal, 118 〔1952〕, pp. 24～39) が引用されている。

34) C. I., p. 126～128. Wilson の presentation より。

35) Jacobsen and Adams, Salt and silt の第2のテーマがこの問題で，Silt and Ancient Landscape という項目の下に論ぜられている。Nahrwān 運河も，この問題に関聯して触れられる。

36) この制度については，以下の Wilson の説明と少し異なった観点からの説明が加藤一朗氏によって与えられている（前掲「オリエントの灌漑文明」47～51 ページ）。

37) C. I., p. 127 f. なお Wilson も，大規模灌漑は王朝国家の出現の原因ではなく結果であること，最初の王や貴族は水や食物の問題に行政的に関与しなかったことについて，Adams らの見解に同意するに至ったといっている（p. 131）。この点については本シンポジウムの Background Papers の一つである Adams, Early Civilizations, Subsistence, and Enviroment (C. I., pp. 269～296) にやや一般的に述べられている。

38) C. I., p. 27.

39) E. Burrows, Archaic Texts (Ur Excavation Texts II, London, 1935) および The

Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago, V〔1956〕, p. 121 f. 参照。

40) C. I., pp. 74～79. また Gelb は，ダイメルの基本的再構成以後知られるに至った相当数の他都市の史料が，私的土地所有経済の優越を示すと考えていたが，ロシア人たちが「多数の土地や manors が個人によってではなく，家族もしくは氏族 clan によって所有されていた」ことを示して彼の誤りを正してくれたという。前掲（註 29）Дьяконов の著書（巻末に英文レジュメがある）および同氏の Sale of Land in Pre-Sargonic Sumer (in Papers Presented by the Soviet Delegation at the XXIII International Congress of Orientalists, Moscow, 1954)参照。Дьяконов (=Diakonoff) の主張の基礎となった土地売買記録の幾つかは，中原与茂九郎「売買契約泥章から観た初期王朝期～アッカード王朝期の土地所有形態」(『史林』42巻〔1959〕3号所収）において取扱われている。

41) C. I., p. 92.

〔補註〕（38頁）この種の紹介は Journal of Near Eastern Studies, vol XXII, Nr. 1 〔1963〕, pp. 64～69 (Alexander Badawy による）にある。